



杉滝子



久坂文子



榎取寿子



吉田松陰



鬼玉千代



入江満智子

松陰研究にも必須の文献  
女性の視点からの松陰像！

# 松陰先生にゆかり深き婦人

広瀬敏子著

山口県教育会蔵版

久坂文子（涙袖帖のこと）妹

涙袖帖なみすでうでといふのは、只今榊取三郎かきとり氏の所蔵されて居るもので、久坂玄瑞くまげんずゐが妻の文子に贈つた書簡集である。文子の事はこれより外に記したものが無いので、勢ひこれによつて文子を見て行く事とする。

玄瑞げんずゐは、松陰先生が防長第一流の人物と稱讃された松門の人材であり、文子は先生の末の妹に當る。

その頃はペリーが浦賀に來たことから日本全國ほんたうの非常時となつて居たが、ことに長州は尊王の志士が多いだけ、藩内は煮えかへるやうな騒がしさであつた。玄瑞もその勤王家の大立物であるから、殆んど旅から旅への暮しが多かつた。文子が玄瑞に嫁した時には、夫は十八歳妻が十五歳であつた。玄瑞の親友口羽把山くちばはざんが、この結婚を喜び、杉氏の家風の美しさ、兄達のそれ／＼の美點等を賞揚して、これから久坂もほんたうの發展が出来るであらうと喜んで當る。

だが、まことにこれが久坂にとつても文子にとつても大きな而も若い人生の門出であつた。それからの家庭生活は足掛け八年間で、玄瑞が蛤はまごも門の戦争に自刃した時で終るのであるが、實際に家庭らしい生活を営んだ月日は二年に足りない。その他は主に江戸や京都で玄瑞は勤王のことに命いのちをかけて奔走して居たのである。

つまりきれ／＼ではあるが六年に亘る異郷の生活の玄瑞から、萩の故郷に留守居して居る妻へ、その折／＼に認めて飛脚の序に送つた手紙こそ、この涙袖帖である。

廿五歳の有爲な志士玄瑞が戦歿して、文子は廿二歳のうら若い寡婦となつた。その後文子は實家の杉家で、夫の靈たまとともに老父母の膝下に歲月を過したが、一時召されて藩公の幼君今の毛利（元昭侯）の傅役もろやくとなり、名も美和子と改めた。然るに明治十四年には榊取素彦もとひこ（元の小田村伊之助）に嫁して居た姉の希子が亡くなつて、次第に老境に向ふ夫と二人の遺子とが淋しくもそのあとに残されたので、實家の母澁子は孫達の不便ふびんさや、素彦の身邊を案じて、美和子に姉の後を見るやうにとの懇ろな諭しがあつたが、二年に亘る考慮の末に、美和子は遂に心を決して老母の言葉に従ひ榊取家に再嫁するやうになつた。

# 発刊の辞

著者広瀬敏子女史は、海軍大佐広瀬豊氏の夫人である。夫君豊氏は、かねて松陰研究の権威者で、本会の一事業たる吉田松陰全集編纂委員の一人である。女史は日本女子大学の出身で、同学付属高等女学校教諭の現職にあり、日本史、東洋史の教授を担当しておられる。しかも専心編纂に没頭せられた夫君の労を補いつつ、夫君の助手として、多大の努力を払われた隠れたる功労者の一人である。

本書は、夫人が編纂を手伝われるかたわら、特に女性の立場から感激せられた事柄を整理記述せられ、数回にわたって、かつて本会の機関誌「山口県教育」に寄稿せられたものである。これは松陰先生を研究する者の必読すべき良著であるばかりでなく、婦人修養の好伴侶としても女子教育上貴重な資料であるから、ここに取りまとめ再び上梓し、一冊子として江湖に提供することにした。

昭和十年十一月

山口県教育会

(文章のこく一部を現代風に改めました)

## 復刻に際して

■本書は昭和十年に山口県教育会から刊行されて大好評となり、直ちに全国版として東京武蔵野書院より版を重ねましたが、今回はその中で最も用紙の劣化していない昭和十一年版を使用。昭和十七年の第12版で初めて増補された「烈婦登波」を収録すると同時に、版面をB6判からA5判に拡大しました。

## 目次

- ① 杉滝子(生母)
  - ② 吉田久満子(養母)
  - ③ 児玉千代(長妹)
  - ④ 楫取寿子(次妹)
  - 付野村望東尼と楫取夫妻
  - ⑤ 久坂文子(末妹)
  - ⑥ 入江満智子(門弟の母)
- 付烈婦登波

■ 体 裁 A5判並製箱入二百頁

■ 定 価 四千元(税別)

■ 予約特価 三千元(税別)

■ 特価締切 26年9月24日

■ 本書発売 26年10月中旬

申込ハガキの「セット特価」をどうぞご覧ください。

▼書店不卸 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13

電話 〇八三四〇二九五

マツノ書店

## 『松陰先生にゆかり深き婦人』を推す

広島大学大学院教授 三宅 紹宣

### 1. 女性の視点からの松陰像

吉田松陰については、現在でも硬直化したかたくなるしいイメージで語られることも多い。しかし、『吉田松陰全集』など原史料から浮かび上がる松陰の実像は、心優しくユーモアあふれるというのが実感に近い。このような生き生きとした松陰の実像をよみがえらせるには、関係した女性の視点から見た松陰像が重要であると常々思っていた。その中で出会ったのが本書であり、ここに登場する七人の女性のことを念頭に置きつつ、『吉田松陰全集』を読み直すと、松陰の心の優しさ、ユーモアの妙などに改めて気づかされることがあった。その意味で、本書は松陰研究を深めていくためには是非読まれるべき本と思う。また、松陰は女子教育に極めて熱心であり、そのことが三人の妹との交流によく出ている。女子教育史の上でも注目すべき本である。

### 2. 本書の成り立ち

本書の著者広瀬敏子は、『吉田松陰全集』の編纂者の一人広瀬豊の夫人であり、日本女子大学附属高等女学校教諭として、日本史、東洋史の授業を担当していた。広瀬豊は、大正四年（一九一五）海軍大学校を卒業し、大正十一年（一九二二）から三年間、東京帝国大学文学部に派遣され、教育学を専攻した異色の海軍大佐である。『定本版吉田松陰全集』には、史料ごとに校訂担当者の印が付されているが、広瀬が担当した史料は膨大な量にのぼり、とりわけ最も困難を極める書簡編の編集担当は広瀬である。広瀬豊『吉田松陰の研究』（武威野書院、一九四三年、マツノ書店復刻、一九八九年）には、広瀬が採訪した広範囲な史料調査の様子が克明に記録されている。かつて私は、現在は山口県文書館蔵となっている吉田家文書の目録作成の監修を担当したことがあるが、吉田家文書の一点ごとに広瀬豊による表題と考証が付けられており、丁寧で厳密な調査ぶりに感銘した思い出がある。これらの仕事の助手として貢献したのが敏子であり、松陰文書に精通し、調査先で聞き書きした話などをもとに生まれたのが本書である。その学識の深さは、本書を読めば納得できる。なお、本書の奥付は、広瀬敏となっている。敏子の旧姓は内田敏であり、敏が戸籍名であった可能性があるが、なぜ奥付にこちらを用いたかは不明である。

### 3. 松陰をめぐる七人の女性

次に本書の内容を見てみよう。最初は松陰の生母杉瀧子である。瀧子は、謹厳精励な夫杉百合之助に仕えて、松陰が生まれたところは困難極まりなかった家庭をよく支え、三男、四女（艶は早世）をよく育てた。その苦勞と献身の様子は、めつたに人をほめることのなかった玉木文之進が、「丈夫（じょうふ）、立派な男

子)も及ばない」とほめたたえていることでもわかる。この母に育てられた松陰は、女子教育に強い関心を持った。妹千代宛書簡の中で、「人の賢いのもおろかなのも、たいてい父母の教えによる。とりわけ男子は母の教えを受けることがほとんどである。その教えも、さとすのではなく、正しきをもって感ぜさせるのである。」と述べるのは、瀧子から受けた体験がもとになっていよう。

瀧子の章の庄巻は、安政六年(一八五九)一月、野山獄に入れられていた松陰の急進論に対し、門人たちが時期尚早として反対したこともあり、全てに悲憤した松陰が絶食死をはかろうとした時である。これを感じとどまらせたのは、父や玉木文之進の手紙もあるが、何よりも瀧子の心づくしの手料理と手紙であった。「短慮はやめて、母に対して食べてほしい」と願っている。これによって、何事にも自己の信念を曲げることのなかった松陰も、決心を翻すこととなったのである。

児玉千代(長妹)は、松陰と三つ違いで、団子岩の旧宅でもに育ったという意識を共有し、とりわけ親しい妹であった。松陰の千代にかける期待も大きく、長文の手紙を多数書いて教えを伝え、激励している。千代も松陰の期待に応えた。杉家には、一門の修養会があったが、そのなかには「女の会」もあり、千代が働き役であった。松陰が杉家に戻ると、女誠や烈女伝などを講義した。

安政六年五月、江戸への護送が決まり、別れに臨み多忙をきわめた松陰であるが、三人の妹に手紙を書き、「平田家訓」(明和五年長州藩平田市郎左衛門耐久矩筆)を残した。そこでは母たるものの心得を論し、この書を参考にして子供を育ててほしいとしている。家訓の筆写代はかかったが、教えがよく腹に入るなら

ば、銭一文をあげて極楽浄土へ行くよりましだと書いている。死への訣別の迫った人とも思えないこのユーモアが、松陰の本領である。松陰の「狂」の思想(陽明学の概念)についてはいまだに誤解を受けやすいが、現代の用法の狂ではないことが、このゆとりの心からわかる。

楯取寿子(次妹)は、長州藩儒官小田村素太郎(松陰が松下村塾のあとを託した。のち楯取素彦)に嫁いだ。寿子の子が生まれると、松陰は誕生祝いの詩を贈り、小田村やおじたちも学問好きだから、早く立派な者になれよと記している。寿子には溫柔寛緩を以て育て、いつの日か学問を成すの資とせよとしている。

久坂文子(末妹)は、松陰が防長第一流の人物と称賞した久坂玄瑞に嫁いだ。玄瑞は政治活動に奔走し、ほとんど家に帰ることができなかったが、旅先から文子に書いた一通の手紙が残された。これは、後の夫になる楯取素彦によって「涙袖帖」と名付けられた。この章は、この「涙袖帖」をていねいに読み解くことによって、玄瑞と文子の心の交流を鮮やかに浮かび上がらせている。

他の女性も紹介したいけれど、もはや紙幅を超えたのでこれぐらいにとどめたい。本書は、銃後の母が声高に叫ばれていた時代のものとは思えないほどしっとりとした筆致で叙述されており、読みやすくなる工夫も行き届いている。是非、直接本書に当たって味読いただきたいと思います。